

論文の内容の要旨

論文題目 移動する人びとの教育と言語
—中国朝鮮族に関するエスノグラフィー—

氏 名 趙 貴花

本論文は、1990年以降中国内外へと活発な移動を行っている中国朝鮮族に着目し、移動における彼らのライフスタイルや言語意識、アイデンティティの変容および子どもの教育の実態を明らかにすることを目的とした研究である。3部6章で構成されており、第Ⅰ部（第1章）では中国東北部における朝鮮族学校の二言語教育の実態を明らかにし、第Ⅱ部（第2章、第3章）では朝鮮族の中国内における移動を北京の事例を取り上げて考察した。第Ⅲ部（第4章、第5章、第6章）では朝鮮族の国外への移動に注目し、韓国と日本の事例を通じて検討した。

第1章では、中国の少数民族教育としての公教育機関である朝鮮族学校における二言語育の実態を延吉市とハルビン市における現地調査を通じて明らかにした。この二つの都市において各一校を選んで調査を行った結果、まず朝鮮族生徒のほとんどが中国語と朝鮮語の両方を駆使できることが明らかになった。しかし、この二つの言語能力は必ずしも一致することがなく、一方の言語がもう一方の言語より熟達していることが分かった。次に、朝鮮族生徒の「中国人」としての国民的帰属意識は一般的に強かったが、「朝鮮族」として

のエスニック・アイデンティティは地域や朝鮮語の能力に関係なく、強い者と弱い者の両方が確認された。第三に、上記の二つの地域における朝鮮族学校では、近年の中国と韓国の交流が進展する中で、朝鮮語を主要言語とする延吉市の朝鮮族学校に朝鮮語の習得を目的としている漢族の子どもが増える一方、中国語を主に使用するハルビンの朝鮮族学校には中国語の習得を目指した韓国人留学生が入りつつあるという興味深い現象が見られた。このような状況は、従来中国政府によって「少数民族教育」と指定され自民族の生徒だけを対象にし、自民族の言語や文化を教えることによって民族の伝統を継承するという少数民族学校の教育に新しい意味を与えている。すなわち、少数民族学校における教育が、すでに「少数民族」に限定する教育ではなく、よりグローバルな市場に応じるものになっている。

第2章では、北京の望京「韓国城」というコリアンタウンに注目し、このコミュニティは中国の各地から移動してきた朝鮮族と韓国からきた人びとおよび北朝鮮の人びと、ここを訪れる中国人や日本人が共同で創り上げた「韓国城」という名前の東アジアのハイブリッド文化街であることを示した。中国内外からそれぞれ北京に移動した韓国人、朝鮮族、北朝鮮の人びとは、この「韓国城」という空間において、政治的な関係を越えて、経済的、言語的および文化的に共生できる空間を創り上げている。けれども、望京「韓国城」は決して韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとによる閉鎖的なエスニック・コミュニティを形成したり、あるいはエスニック・ビジネスとしての観光地になっているのではない。キムチといった朝鮮半島においては伝統文化の要素であるものが、望京という都市環状新興特区に移動した時、そこではエスニックであって、もはやエスニックではない新興文化の要素となっている。グローバル化の中で、飲食と言語、居住スタイルを特徴とするこのコミュニティのライフスタイルが、韓国人や朝鮮族および北朝鮮の人びとに限らず、より多くの人びとを惹きつけている。

第3章では、北京における朝鮮族の子どもの教育について論じた。北京在住の朝鮮族の若い人たちは子どもに教育において中国語と英語を重視し、子どもを漢族学校に通わせるのが一般的である。けれども、彼らは朝鮮語を完全に捨てるのではなく、家族との繋がりを維持するために、家庭教育を通じて子どもに一定の朝鮮語を学ばせることも見られた。一方、北京在住の朝鮮族の中には、自分と同じく子どもが学校において朝鮮語を習得することを求める親もいる。しかし、北京には公教育機関としての朝鮮族学校がないため、子どもを昼間には漢族学校に通わせるが、放課後や週末になると朝鮮語／韓国語の補習校に

通わせることが確認された。このように、さまざまな方法で子どもに朝鮮族のエスニック言語である朝鮮語を継承させようとするには、朝鮮族の親たちの言語を通じて家族の絆や朝鮮族コミュニティとの繋がりを維持しようとする考えがあり、それは文化的なアイデンティティにほかならないと考えられる。

第4章では、朝鮮族の韓国への移動を「帰郷」ととらえ、「帰郷」先において彼らはどのように受け入れられているのか、彼らのアイデンティティはどのように構築／再構築されているのかについて考察した。韓国の在外同胞法における朝鮮族の法的地位をめぐって常に揺らいでいる韓国政府の姿勢は、韓国社会における朝鮮族への眼差しにも影響を与えている。韓国で単純肉体労働に従事する朝鮮族は、社会的に「外国人出稼ぎ労働者」や「中国人」として排除される一方、高学歴を有する朝鮮族の場合には「同胞」として「韓国人」として受け入れられる傾向がある。

高学歴朝鮮族に対する韓国政府や現地社会の人びとの受け入れ姿勢は、高学歴朝鮮族に「同胞」意識や「韓国人」としての帰属意識を持たせることに積極的な役割を果たしている。しかし、韓国における単純肉体労働者への社会的な排除の眼差しは高学歴朝鮮族のアイデンティティの揺らぎをもたらしている。そんな葛藤の中で、高学歴朝鮮族の多くは自ら「中国人」そして「朝鮮族」というアイデンティティを再構築することが明らかになった。そして、高学歴朝鮮族の人びとは韓国へ「帰郷」することによって、アイデンティティは常に変化すると同時に自分で変えることもできることに気づき、教育がアイデンティティ形成の装置であることを認識するようになった。彼らは自分の子どもにはどのようなアイデンティティを獲得させるかを考え、そのアイデンティティの獲得の有効な手段として教育戦略を行っている。

第5章では、出稼ぎでソウルに移動した朝鮮族の労働者たちが集住する街であるガリボン「同胞タウン」に焦点をあて、それは朝鮮族と韓国の市民団体および現地の商人たちが共同に創りあげた街であることを示した。社会的底辺に置かれている朝鮮族の労働者たちは、ガリボンで「自分たちの世界」を創造しているが、韓国政府の再開発という名目のもとで、この街は崩壊させられようとしている。そうした状況の中で、彼らはほかの地域において自分たちの新しいコミュニティを作ろうとしている。けれども、彼らは必ずしも過去のような閉鎖的な空間を作るのではなく、韓国社会と向き合い、変化する自分たちの姿を積極的に表現しようとしている。

第6章では、日本へ移動した高学歴朝鮮族に焦点をあて、彼らの日中韓3国におけるダ

イナミックな移動の実態と家庭教育における言語教育戦略、そして彼ら自身の新しいアイデンティティの構築について考察した。朝鮮族のらびとが中国の朝鮮族学校で多言語（中国語、朝鮮語、日本語あるいは英語）を習得したことが、彼らの東アジアの域内における移動を活発化させている。特に、国際移動が比較的容易である日本在住の朝鮮族にとって、日中韓3国はすでに国境を超えた一つの生活圏となっている。彼らは、より良い教育やより良い仕事、両親や親戚との再会を目的に日中韓の間を移動している。

日本在住の高学歴朝鮮族のらびとは、子どもへの言語教育を重視し、一般的に三つの言語を考えている。そして、それらの言語を学校教育だけでなく、家庭教育や語学学校といった学校外教育を通じて、子どもに習得させようとしている。けれども、家庭の中では日本の学校では習得しにくい言語（中国語や朝鮮語／韓国語）を教える場合が多く見られた。

こうした言語教育戦略を行うことになったのは、高学歴朝鮮族の親自身が子どもの言語教育において投資するに値する知識があるためである。彼らは、国際移動の中で自分たちの言語資本に目覚め、長期的な視野から子どもたちが激しい競争社会の中で生き残るための一種の生きる力として、自分たちの言語資本を戦略的に次世代へ継承させようとしている。また、朝鮮族の多言語能力とダイナミックな国際移動は彼らのアイデンティティにも影響を与えている。日本在住の高学歴朝鮮族の中には、国籍や出身のエスニック・グループにこだわらず、複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体に同時に帰属意識を持つことで、政治的および歴史的な枠組みを超えた新しいハイブリッドな文化的アイデンティティを創造していることが見られた。こうした言語的、文化的に構築したハイブリッド・アイデンティティの根底には、中国の朝鮮族学校の多言語教育が重要な役割を果たしている。このような朝鮮族のらびとは、子どもにも多様で柔軟なアイデンティティの構築を目指していると考えており、戦略的な言語教育はそのための手段でもあると考えられる。